
サクラサク

コバヤシ ツヤコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクラサク

【Nコード】

N3867I

【作者名】

コバヤシ ツヤコ

【あらすじ】

ある春の日のできごと

「春が来るね」

「うん」

ほんの少しの沈黙のあと、ぼくらはどちらからともなくお互いの手を握った。

ただひとつ確かなことは、ぼくらが揃ってこの日を待っていたということだ。いつからかなんて覚えていない。すでに両手の指じや数え切れないほど、気の遠くなるような長い時間が経っていることだけは確かだけれど。はじめて小さなつぼみが芽吹いたあの日も、まだ寒さの残る朝にやわらかな花びらがゆっくりと開きはじめてその日も、それが何月何日だったのかは思い出せないけれど、だけどぼくらはその過程をすべて見てきたんだ。

「明日も晴れるかな」

「うん」

ふと、すべての音が聞こえなくなった。

瞬間、激しい風がぼくらを巻き込んでいく。身構える間もなく、視界が一面桃色に染まった。ぼくらの繋いだ手が、風に弾かれて離れてしまう。やがて桃色の渦から吹き出された僕に残されたのは、どこまでも続く青い空と、かすかに残ったあの手の温かさだけ。

気がつくと、見たことのない地面に伏せていた。ぼくがたくさんの時を共に過ごしたあの桜の木は、もうどこにも見当たらなかった。

「明日も晴れるかな」

どこかで君の音がする。

「晴れるよ、きつと」

そう小さく呟いてみた。

ぼくはもう、ひとりで歩いていかなくちや。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3867i/>

サクラサク

2010年10月11日17時47分発行